



大阪医科大学附属病院 広域医療連携センター

M I Z U K I

医療連携室ニュース「みずき」

〔volume〕

33

2017 JANUARY

CONTENTS

2017 年頭のご挨拶

根治性と整容性の両立を目指した
乳癌治療を展開しています

「SAP/CSII外来」を開始しました

新任のご挨拶

「難病総合センター」の活動

編集後記



広域医療連携センター
センター長
内山 和久

2017 年頭のご挨拶

明けましておめでとうございます。先生方におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

昨年春には病院西側に6階建ての中央手術棟が竣工しました。2・3階に計20室の手術室と16床のICU、そして4階には胸部外科病棟、5階には消化器外科病棟が配置されました。3階にはハイブリッド手術やロボット手術など最新技術が導入されました。他施設からも注目され、見学者からも数々のご称賛を頂戴しました。

本年からいよいよ具体的な新病棟建設計画がスタートします。5年後にはメインの北タワー病棟が建設される予定ですが、南病棟(外来棟)、6号館を改築した管理棟などすべてが整備されるのはほぼ10年先、つまり大阪医科大学創立100周年を迎える頃になります。

職員一同、今後とも特定機能病院の名に恥じない高度な先進医療を推進して参りますので、本年も何卒よろしくごお願い申し上げます。



TOPIC1 乳腺・内分泌外科

根治性と整容性の両立を目指した乳癌治療を展開しています

乳腺・内分泌外科 科長 岩本 充彦
(いわもと みつひこ)



(左から) 藤岡、寺沢、岩本、松田、木村

■ 乳癌の現状と治療方法

乳癌にはサブタイプといわれる様々なタイプが存在します。また乳癌は、しばしば「全身病」とであると例えられます。そのため原則として手術だけで治療が完遂することは稀です。全身病であるが故に、根治に向け、病状やサブタイプに応じた全身治療、すなわち内分泌療法、化学療法、抗HER2薬を中心とした分子標的治療などを行う必要があります。当科では乳癌の診断から手術、さらに全身治療を一貫して担当しています。週4回の乳腺専門外来を中心に、ご紹介の患者さまはもとより、術後の患者さまの希望に迅速に対応し得るよう、乳腺専門医を含む専門のスタッフを配置し診療にあたっています。

■ 乳房温存療法と乳房再建術

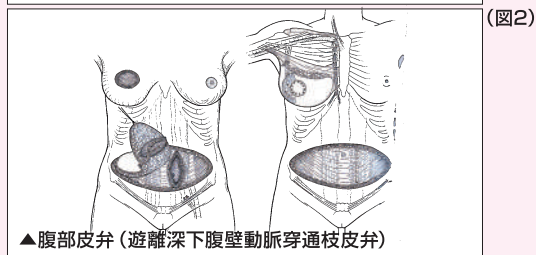
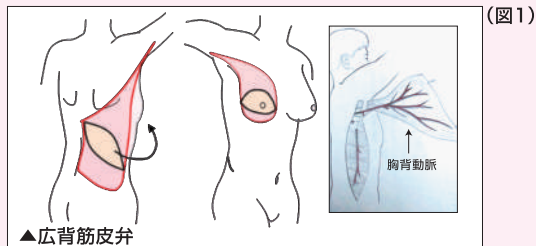
乳癌手術ほど、ここ数十年間で術式が大きく変化した手術はないといわれています。以前は乳房に加えて大胸筋まで切除する術式が主流でありましたが、近年は大胸筋を温存し、さらに乳房温存療法が主流となりました。しかしながら、乳腺組織は決して再生することがないため、乳頭は温存されているものの整容性に優れていない症例が多いことも事実でありました。乳房温存療法において、整容性と根治性は対極にあるといえます。つまり整容性を重視して切除範囲を狭めれば、根治性が劣ることに繋がります。根治性を追求して広く切除すれば整容性が劣ることとなります。整容性と根治性の両立を目指すべく、昨今最も脚光を浴びているのが乳房再建術です。本院では、我々乳腺・内分泌外科と形成外科がコラボし、積極的に乳房再建に取り組んでいます。実は世界の名立たる乳癌治療における先進的な施設の多くでは、乳房温存率が減少しています。整容性に劣る乳房温存術を施行するよりは乳房全摘を行い、局所の根治を得たうえでレベルの高い乳房再建術を施行することが望ましいと考えられているからです。我々も世界のトップ施設への追従を目指し、積極的な乳房再建を展開中です。

■ 乳房再建の術式

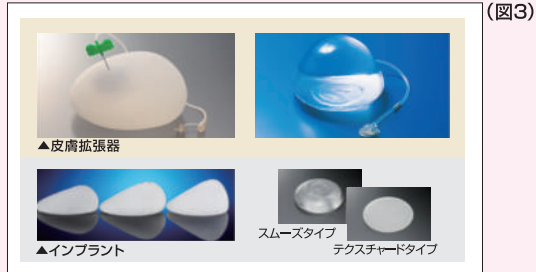
乳房再建術には自身の体の一部を用いる自家組織移植(図1・2)とシリコン等を用いたインプラント手術(図3)があります。また、乳癌手術と同時に進行一期的再建と、乳癌手術の後、一定の期間を空けて行う二期的再建術があります。本院では、あらゆる術式の施行が可能であり、病状や乳癌のサブタイプに応じ、また患者さまの希望も尊重し、最も望ましい術式の提示を実践しています。自家組織移植においては広背筋皮弁(図1)や、より難度が高いとされる遊離深下腹壁動脈穿通枝皮弁(図2)も施行可能です。

乳癌と診断された、あるいは乳癌が疑われる、また乳癌術後で乳房再建をご希望の患者さまがおられましたら、是非私共にご相談ください。

【自家組織移植】



【インプラント及び皮膚拡張器】



初診担当表

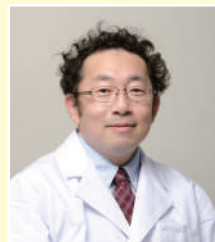
	月	火	水	木	金
午前			担当医(※交代制) ※交替制の医師 木村 光誠、藤岡 大也、 寺沢 理沙、松田 純奈		岩本 充彦 木村 光誠 藤岡 大也 寺沢 理沙 松田 純奈
午後	担当医(※交代制) ※交替制の医師 岩本 充彦、木村 光誠、藤岡 大也、 寺沢 理沙、松田 純奈			再診のみ (完全予約制)	再診のみ (完全予約制)



TOPIC2 糖尿病代謝・内分泌内科

「SAP/CSII外来」を開始しました

糖尿病代謝・内分泌内科 医長 大西 峰樹
(おおにし みねき)



インスリン分泌が遺伝的素因やウイルス感染などを契機に枯渇する1型糖尿病は、しばしば治療に難渋します。インスリン自己注射療法が基本なのですが、1日4~5回のインスリン注射を行っても血糖コントロールが不安定な場合もあります。このような場合、インスリンポンプ療法(CSII)が有効な場合があります。

CSIIは携帯型インスリン注入ポンプ(写真1)を用いて、インスリンを皮下に持続的に注入する治療法です。血糖コントロールが難しい場合や、生活の自由度を高めたい場合などに有効です。

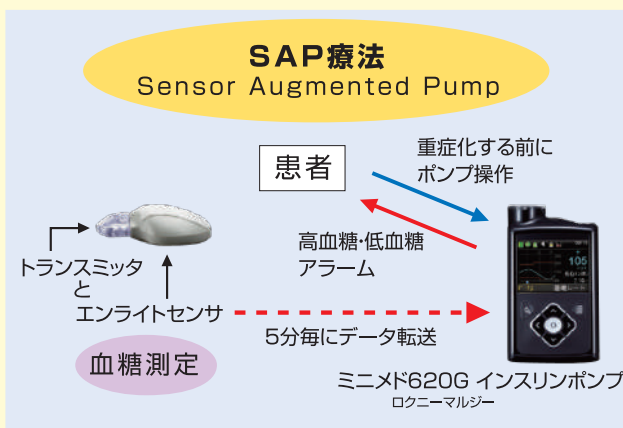


(写真1)

SAP(写真2)はCSIIに持続血糖測定機能がついたシステムでリアルタイムに血糖を知ることができ、高血糖・低血糖の発現を減らしつつ、血糖コントロールの改善を図ることが可能になりました。糖尿病合併妊娠の患者さまも使用可能です。

本院では平成28年4月にこのCSIIとSAPの治療に特化した専門外来を日本で最初に開設し、1人あたり十分な時間を充て、診療しております。入院での短期導入や、外来での通院導入にも対応しております。

導入希望または導入をご検討されている患者さまがいらっしゃいましたら本院までご紹介のほどよろしくお願いたします。



(写真2)

初診担当表

	月	火	水	木	金
午前	忌部 尚	大西 峰樹 金網 規夫	今川 彰久	寺前 純吾 佐野 寛行	今川 彰久 中辻 文彦

SAP・CSII外来(再診・予約制)

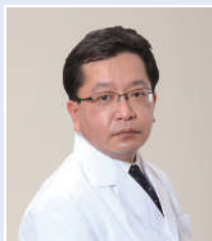
午後	○	○	○		
----	---	---	---	--	--

TOPIC3

新任のご挨拶

血液内科 科長 秋岡 寿一
(あきおか としかず)

(平成28年11月1日着任)



血液内科は診断・治療の進歩が著しい分野であり、当科では地域の先生方の信頼に応えるべく最新の医療を行ってまいります。また、日常診療でみられる血液検査異常等についてもご協力させていただきますのでご依頼ください。

ご紹介いただく際は本院医療連携室にてご予約をお願い申し上げます。緊急の場合は担当医が随時対応いたしますので、まずは医療連携室までご連絡ください。

- 専門分野 造血管腫瘍など
- 資格 血液専門医
- 略歴 1994年 近畿大学医学部卒業、大阪医科大学 第一内科 研修医
- 1996年 自治医科大学附属病院 血液内科 臨床助手
- 1998年 大阪医科大学 第一内科 専攻医
- 2003年 大阪医科大学 第一内科 助手
- 2007年 大阪医科大学 第一内科 助教

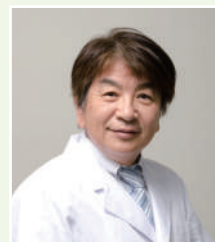


TOPIC4 難病総合センター

「難病総合センター」の活動

難病総合センター センター長 木村 文治

(きむら ぶんじ)



平成27年1月の難病新法および改正児童福祉法の発足に伴い、本院では「難病総合センター」を運営し、難病診療に関するあらゆる相談を受付けています。また、難病疾患の理解を深めていただけるように啓発活動として、リーフレット作成・講義研修・医療行為研修などにも取り組んでいます。最近では、平成28年4月から神経難病患者さまに保険適応が認められたロボットスーツによるリハビリテーションも導入しております。

各診療科で行われている診療（例えば、「炎症性腸疾患センター」「リウマチ膠原病難病センター」「神経難病センター」）を活かしたうえで、就労支援や在宅療養を含めた総合的な難病診療サービスを充実させ、多職種専門医療チームの知識・技能が集結したセンターとして活動を行っています。具体的には、



大阪府からの支援事業として「難病患者在宅医療」の推進があります。われわれ難病専門スタッフが地域の在宅看護・福祉・医療機関およびかかりつけ医と協力し、安心して在宅による療養生活が継続できるよう難病診療支援を行っています。

どうぞ、大阪医科大学難病総合センターをよろしくお願いたします。

(ホームページを開設しました)

→<http://hospital.osaka-med.ac.jp/nanbyou/index.html>



編集後記

初冬、地方のマラソン大会。こりもせずまたレースの中にいる。順調に刻んでいたタイムも一転、レースの終盤、言葉には表せないほどの腰とふくらはぎの痛み、激痛が走る。リタイアが脳裏をよぎる。屈辱の歩き。何か足りなかった。情けなさど悔いが入り混じる。身体の痛みとは別のもうひとつの痛みが加わる。完走は目的にはならない。どう走るか、内容にこそこだわった。なのに、まさかの後半失速。ゴールし、思い通りにならない結果に、悔しさを深める。どんなことも完全には満足できる結果が出せない。いつもの自分らしさに「これも結果かな」とその一日を思い巡らす。帰途の車窓はゆっくり日が暮れ、田園風景がゆるやかに流れていく。力の不足を嘆き、また思いを新たにスタートを切る。年齢を重ねた今もその繰り返し。満足のいく結果などないかもしれない。己の身体は己でしかつくり出せない、ごくごく当たり前の結論を反すうする。最後まで頑張ってくれた身体をもう一度ねぎらい、新しい課題を探し出す。新春、また新しい目標を刻み、決意を新たに、新しい一歩を踏み出し走り出す。(M.M)



医療連携室ご利用のご案内

■ 医療連携室「FAX紹介申込書」受付時間

平日／8:30～20:00

土曜日／8:30～12:00

※第2・第4土曜日は休診です。

※FAX受信は24時間可能(休診時も含む)。

但し受付時間以外の受信については翌診療日以降の対応となります。

■ 送信先 FAX.072-684-6339

■ 連絡先

大阪医科大学附属病院

広域医療連携センター医療連携室

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL.072-683-1221(大代表)内線2308

TEL.072-684-6338(医療連携室直通)

● 本院専用のFAX紹介申込書及び封筒をご用意しております。ご利用の場合は、電話又はFAXにてご請求ください ●